

海外レポート

イタリアでの説教史料の調査と セミナーへの参加

木村 容子

2011年2月1日から4月5日まで大阪市立大学大学院文学研究科「インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム」による助成を受けて、イタリア中部の都市フォーリオの文書館などで史料調査をおこない、イタリア・ボローニャ大学でおこなわれた説教研究セミナーに参加した。今回の渡航目的は、未公開の史料の調査と、文学・歴史学の研究者との交流という2点にあった。まず次節において、比較的新しい学問分野である説教研究について歴史学の視点から触れつつ、私の研究目的を述べておきたい。その後で今回の渡航で得られた史料調査と人的交流について報告する。

1. 説教研究の射程

近年の西欧中世史研究において、説教の記録が多くの分野から関心を寄せられている。とりわけ13世紀に説教を活動の中心に据えて登場した托鉢修道会による説教は、中世最大のマス・コミュニケーション手段として多様なアプローチが試みられている。そもそも説教の記録は、説教師が同業の説教師用のモデルとしてラテン語で執筆した「範例説教」、説教師が「範例説教」に加えて説教準備の際に参照した各種「説教補助マニュアル」、そして聞き手が説教師の語りを書き記した「筆録説教」に分けられる。これらの説教史料は、かつては教会史研究者など一部の限られた人々しか注意を向けなかったが、1970年代以降の社会史の隆盛そして近年の史料論の進展といった歴史学全体の変化を受けて、現在では中世人の心性を探るのに適した史料として、経済史・女性史・美術史など広範な分野において利用されるようになった。我が国においても、本学の大黒俊二氏による研究を通じて説教史料の存在が広く知られるようになってきた。

中世説教を扱った研究は急速にその数を増しているが、大別すると次の2つの方向に分けられるだろう。第一の方向には、説教実践を再構成することに焦点を当てた研究がある。これらの研究は、説教の準備・実践・受容という一連の文脈のなかで説教の実態を解明しようとしている。たとえば記憶と想起を意識した説教作成のテクニッ

ク、説教の場にみられる演劇性、説教の受容を通してみる俗人の信仰生活といったトピックが挙げられる。第二の方向には、個別の説教内容を通じて現実と理念との接点に焦点を当てた研究がある。信仰・政治・経済といった分野別の個別テーマに関して、説教師の語りが分析され、歴史的現実との関係が問われることになる。その際には、いかに説教史料を行政文書や商業文書といった異なる領域の史料とうまく組み合わせて論証するかがポイントとなる。

私はこれまで15世紀のイタリア都市を対象として、上記の2つの方向（説教実践の再構成と、特定の説教主題の分析）を通じて、都市と説教の関係を研究してきた。その結果浮かび上がってきたのは、都市主導による説教の在り方である。托鉢修道会士による遍歴説教は13世紀に都市市民を異端の危険から救うことを目的としてスタートしたが、中世末期になると説教は完全に都市生活の一部となる。都市当局は、「都市の格」を保つため、また都市市民の期待に応えるため、四旬節や待降節におこなわれる連続説教に向けて人気説教師を確保すべく奔走し、さらには説教を平和の回復・経済の改革・風紀の取り締まりといった具体的な問題解決にも積極的に利用したのであった。それに対して説教師は教義上の問題のみならず、国家統治から夫婦生活に至るまで幅広く論じ、そのメッセージは都市市民を党派間の和解や貧民救済施設の創設、奢侈条例の制定といった具体的な行動へと突き動かす力をもっていた。托鉢修道会士による遍歴説教が一種の政治文化として根付いた点が中世末期イタリア都市社会の特徴である。

こうして研究を進めていくなかで、一つの疑問が生じてきた。ある程度まとまった説教内容が判明している事例は、高い知名度を誇った説教師、いわば大物説教師の事例に限られている。たとえば民衆に絶大な人気を誇り、死後6年という異例のスピードで列聖されたランチェスコ会説教師ベルナルディーノ・ダ・シエナ [1380-1444]、あるいはフィレンツェに神聖政治をしき、最後は火刑に処されたカリスマ的説教師ジローラモ・サヴォナローラ [1452-98] の名がまず挙げられるだろう。しかし、説教史料のみならず都市議事録や書簡集など、断片的に残された名もなき説教師の情報を少しずつ集めてゆくと、中世末期のイタリア社会において大量の「普通の」説教師たちが諸都市を遍歴して説教活動に励んでいたことがある種の実感を伴ってわかってきた。では彼ら無名説教師と、都市年代記にもその名が登場するような人気説教師では、何が違ったのだろうか。言い換えれば、説教実践の広がりや深さはどの程度であったのだろうか。こうした問いに答えるためには、無名説教師の説教記録や彼らに関する同時代史料を調査する必要がある。しかしこれらの史料は未刊行のままイタリア各地の古文書館や図書

館に眠っている。今回の渡航目的はそのような未刊行史料を調査することであった。

2. 説教史料の調査

今回の渡航中に、イタリア北部の都市ボローニャや中部の都市フォリーニョを中心に未刊行の説教史料の調査をおこなった。なかでもフォリーニョ市立図書館が所蔵している説教史料は、無名説教師も含めて説教実践の実態を解明してゆくという私の研究目的にもっとも合致した史料であった。その史料とは、前節で述べた「範例」・「説教補助マニュアル」・「筆録」のいずれにも当てはまらない、ある説教師の日記である。この日記は、日記に著者の名は記されていないが内容から判断する限り、15世紀にイタリア中部ウンブリア地方を中心に遍歴説教をおこなったフランチェスコ会説教師の手になるものであり、彼が遍歴説教に携帯し、日々の説教後にその構成などを綴ったノートである。この説教日記のような史料が残されていることは非常に珍しく、他の類似の事例はいまだ報告されていない。

はじめてこの史料の存在を明らかにしたのは M. Sensi 氏であり、今から 40 年ほど前のことである。彼は中世末期の説教活動の実態を示す史料のひとつとして、日記のなかから、1498 年にフォリーニョでおこなわれた四旬節説教のトランスクリプションを発表した。それはわずか 3 頁とはいえ、十分に説教日記の性格を伝える内容であった。しかしながら、それ以降に日記全体へと研究者らの関心が向けられることはなかった。博士論文執筆の過程で説教実践に関心をもった私が日記全体を調べた結果、この説教日記は一説教師の約 20 年間にわたる遍歴説教の記録（四旬節説教 20 回・待降節説教 9 回・不定期説教 30 回）であり、この日記からしか得られない説教の現場に関する情報が含まれていることがわかった。

日記の著者である説教師は、連続説教の度にこの日記（222mm×75mm）を携帯し、説教をおこなった都市の名前をまず太字で見出しとして記入し、日々の説教の中身を米粒のような細かい文字で 1 回およそ 10 行前後（時にはたった 2 行だけのこともあれば、丸 2 頁に及ぶこともある）で記録し続けた。記録されている項目は、常にすべてを満たしているわけではないものの、まず説教の主題と説教開始時に提示する聖書の一節、次に説教全体の構成や説教に適宜差し挟んだ教訓説話の種類、最後に説教に要した時間や首尾である。もし天候不順や説教師の体調不良といった事情により説教が中止となった際でも几帳面にその由を記している。日記に書き込まれたこれらの情報は、一見すると類似の表現の繰

り返しであることも多い。しかし、そうした反復も含めて、日記に記された説教師自身による説教の組み立て方や説教後の自己評価の情報は、範例説教や筆録説教といった史料からは窺い知ることができない貴重なものである。

しかしながら、日記の著者はおそらくは自身の備忘録として日記を作成したため、そこには中世写本に一般的な略字はもちろん、第三者にはよくわからない簡略化した表現や参照の指示が頻繁に登場する。そのため写本の読解は容易ではないが、今回の調査の間に、日記の著者が自らの便宜のためにつくりだした種々の略字を少しずつ明らかにすることができた。たとえば著者は自身の説教を準備する際に他の説教師の説教集をパッチワークのように寄せ集め、編集し、利用している。日記作者は参照した説教師の名前を、たとえば「R」や「Ch」、「A」といったイニシャルで指示している。当初はそれが何を意味するのか不明であったものの、それぞれ「Roberto da Lecce」や「Cherubino da Spoleto」、「Antonio da Vercelli」といった説教師の名であることがわかってきた。その結果、「いつ（教会暦）」、「何を（説教主題）」、「どのように（説教の構成）」説教したのか、無名説教師による遍歴説教の全体像がうっすらと見えてきた。

このような説教作成時における説教の編集過程は、現在の中世説教研究における中心的な論点のひとつとなっている。説教師たちは、過去の偉大な説教師の説教や同時代に生きる他の説教師の説教を筆写し、そこに省略・追加・修正を加えて、日々の説教を準備していた。そこには時代と地域を越えたテキストの濃密なネットワークがみられ、説教を通じた人と写本の移動による文化の形成という大きなテーマが広がっているのである。こうした説教作成の過程については、これまでもっぱら説教のモデルとして書かれた範例説教集に沿って研究が進んできた。ただしイタリアに関しては、ある程度まとまって残されている筆録説教も利用できるため、声の世界と文字の世界の双方に深く関わる説教独自のあり方を探るのに他地域の研究に比べてより有利となっている。さらに、そこに説教の現場をリアルに伝える説教日記を位置付けることで、説教をめぐる世界をより立体的に浮かび上がらせることが私の研究が意図するところである。

本渡航中には、日記の著者を特定するための作業もおこない、一定の見通しを得ることができた。研究の方向性や史料調査にあたっては、ボローニャ大学の M. G. Muzzarelli 氏（中世史）、O. Visani 氏（イタリア文学）から、またフォリーニョでは現在も司祭職の傍ら研究を続けておられる上述の Sensi 氏からも助言を受けることができた。今回調査した説教日記をその他の説教史料と合わせて、今後もしやば大量現象としての説教が西欧中世社会で果たした歴史的意義を探ってゆきたい。

3. セミナー「近代人の形成—説教師の伝記にみる完徳のモデルとそこに至る行程」への参加

渡航中の2011年2月15日にはボローニャ大学でおこなわれた説教研究のセミナー「近代人の形成に向けて—説教師の伝記にみる完徳のモデルとそこへ至る行程 (Per la formazione dell'uomo moderno. Modelli e percorsi per la perfezione dalle vite dei predicatori.)」に参加した。本セミナーでは、まずI. Checcoli氏(ボローニャ大学)が15世紀にフランチェスコ会厳修派説教師について書かれた複数の伝記にみられる特性について、博士論文によりながら報告をおこなった。とりわけ興味深かった指摘は次の2点である。第一に、人気説教師の遍歴説教に同行した仲間の修道士が死後聖人となるであろう人気説教師の「記憶作り l'officina della memoria」をすでに説教師の生前から意識して情報収集をおこなっていた点、第二に、こうした15世紀の説教師の伝記は以前の時期の伝記と比べて奇跡や病氣治癒よりも、説教師自身の美德や具体的な効果(公益質屋の設立など)をともなった説教活動に重点を置いて書かれている点である。報告後には、中世社会史の研究者S. Vecchio氏(フェッラーラ大学)や女性と信仰に関する研究で知られるG. Zarri氏(フィレンツェ大学)によるコメントがあり、報告者を囲んで活発な議論がみられた。

次にナイメーヘン大学(オランダ)の若手研究者3人がそれぞれ報告をおこなった。これらの報告は、現在彼らが進めている研究プロジェクト「中世末期から近世ヨーロッパにおける修道会と修道会のアイデンティティの形成 (Religious Orders and Religious Identity Formation in Late Medieval and Early Modern Europe, ca. 1420-1620)」の一環としての研究報告であった。まずP. Delcorno氏は中世イタリアを代表する説教師ベルナルディーノ・ダ・シエナがその死後、説教師たちが目指すべきモデルとしてのみならず、俗人のモデルとしても機能したことを、説教とフレスコ画という言説と図像の両面から指摘した。一方A. More氏は中世末期から近世にかけてのオランダにおける説教と女性の関係を聖リド

ヴィナの伝記をもとに報告をおこない、A. Huijbers氏は托鉢修道会の自己認識を伝記や年代記から読み取ってゆくという、彼女が博士課程で計画している研究内容について論じた。

本セミナーは「完徳のモデルとしての説教師」に焦点を当て、これまで主に中世史の枠組みで検討されてきた15世紀の説教活動を近世の宗教改革・対抗宗教改革とより密接に関連させて捉えていく必要性を訴えており、セミナー主催者は引き続き2012年にも類似のテーマでワークショップの開催(ボローニャ大学)を計画している。今回セミナーと懇親会に参加することで、こうした若手研究者たちの新たな研究関心に接し、また互いの研究内容について議論することで、大いに刺激を受け、視野を広めることができた。その一方で、「著名説教師」に集中する説教研究の一般的傾向は本セミナーにおいても認められ、当時圧倒的多数であった「無名説教師」に目を向けて説教実践の総体を浮かび上がらせてゆくという上述した私が目指す研究の必要性と可能性を強く感じた一日でもあった。

なお、今回の渡航前の2010年9月にボローニャ大学文学部で開催された中世説教に関する国際セミナー「言葉から行為へ—中世末期における説教の効果 (Dal dire al fare: l'efficacia della predicazione alla fine del Medioevo)」において私は研究報告をおこなっていた。その際に知り合った研究者たちと今回の滞在中にも交流を深めながら、セミナー報告集の出版に向けて、イタリア語でおこなった口頭発表の内容を英訳して提出することもできた。さらに滞在中に知遇を得た研究者からは、2012年7月にイギリス・リーズ大学で開催される中世史学会(International Medieval Congress)でも報告するように誘いを受け、現在その報告準備を進めている。

今回の2か月にわたる派遣期間中には、未刊行史料の調査、セミナーへの参加、さらにムッザレリ教授による中世都市史の講義を聴講するなど、充実した時間を過ごすことができた。このような史料調査と人的交流の貴重な機会を与えてくれた海外派遣プログラムに深く感謝しながら、今後も自身の研究を国際的に発信するに足る内容へとさらに発展させてゆきたい。